

## 令和6年度文化祭模試解答

# EX

### I

- a 孟子
- b 焚書・坑儒（「坑」の漢字に注意。「抗」ではない）
- c 董仲舒（「舒」の漢字に注意）
- d 鄒衍
- e 王莽（「莽」の字体は、『漢書』によれば「くさかんむり」の下は「大」ではなく「犬」であるが、現在のパソコンでは使われていないので、仮に「莽」の字をあてている。正字の方を正解とする）
- f 光武
- g 鄭玄
- h 道

### 問

- (1) 魯（「魯国」でも可）
- (2) 墨家
- (3) 李斯
- (4) 段楊爾
- (5) 『傷寒論』
- (6) 三武一宗の法難（「三武一宗の廃仏」でも可）
- (A) 科挙の試験科目である儒学は、貴族階級必須の教養・国家統治の理念という地位が続いた。太宗は『五経正義』を科挙の国定教科書とするなど、儒教の統制に努めた。また古文復興運動が起こり、韓愈は、儒教の立場から仏教を厳しく批判した。しかし訓詁学は次第に枝葉末節にこだわる解釈に落ち込み、思想的な発展は見られなくなった。宋では、士大夫の支える朱子学という儒学革新運動が現れた。北宋の周敦頤に始まり南宋の朱熹により大成された朱子学は、性理学の性格が強い。しかし元では科挙が停止され、儒学は一時衰退した。明代には、朱子学が皇帝専制政治を支える理念として隆盛を迎えた。永楽帝は、朱子学の理念をまとめた『性理大全』、科挙の基準となる『四書大全』・『五経大全』を制定した。さらに陽明学も現れ流行した。しかし、明末には陽明学の空疎な議論や理念を欠いた行動などが反省され、考証学が復活した。18世紀となり外圧が激しくなると、中国社会の後進性が意識され、清朝の官僚らは洋務運動を始めるが、それは「中体西用」と言われたようにあくまで儒教的な価

値観・道徳観を守り、西洋の技術のみを用いようとしたもので、限界があった。清末には康有為などの公羊学派が、孔子の教えを社会改革に結びつくものとして戊戌の変法を試みたものの挫折した。1915年からの文学革命の中で、陳独秀は新時代の精神として「民主と科学」を掲げ、儒教は専制政治の精神的支柱に他ならないと批判した。儒教批判は孫文の国民革命、中国共産党の革命運動の中で推し進められ、政治理念としての儒教は完全に否定された。1960年代後半からの文化大革命では、孔子廟が破壊されるなど受難の時期となった。批林批孔運動を展開した毛沢東の死後、現代の中国では孔子は思想家・教育者として再評価されている。

## Ⅱ

### 問

- (1) 北畠親房
- (2) 貴族政治が進展していくに従い、特定の官職を特定の氏族が独占・世襲するようになり、その正当性を示す必要が無くなった。さらに、その後の武家の時代は「勝てば官軍」で、改めて正当性を示す必要は無かったから。
- (3) ア 清和  
イ 陽成
- (4) 延喜・天曆の治
- (5) 藤原実頼
- (6) 後三条
- (7) 地方武士の中央進出や貴族の没落により、中央で栄えた国風文化が地方に普及し、また貴族も庶民文化や地方文化を積極的に取り込むようになり、それまでにない新鮮で豊かな文化が生み出された。
- (8) 北条時政は源頼家の外戚・比企能員ら一族を滅ぼし、源実朝を将軍に擁立した。この際時政は政所別当に就いているが、以後この地位は執権と称されることになった。また父に代わり執権となった北条義時は、侍所別当・和田義盛ら一族を滅ぼした。以後北条氏は政所と侍所の別当を世襲的に兼任し、鎌倉幕府内における権力は確固としたものとなった。
- (9) 吉野
- (10) 光明
- (11) 承久の乱
- (12) 初代摂家将軍：九条頼経(「藤原頼経」でも可)  
初代親王将軍：宗尊親王
- (13) 関東管領
- (14) 足利義昭

(15) 光秀

(16) 元関白・近衛前久の養子となったから。

(17)

(あ) 『読史余論』

(い) 鎌倉幕府・室町幕府と京都朝廷が並存しており、将軍が朝廷の権威に依存し、経済基盤も重複していたため。

(う) 江戸時代に朱子学の大義名分論が重視されるようになったように、儒学が隆盛し文治政治が行われて、徳川幕府の正統性など歴史についても合理的・実証的に解釈する必要性が出たため。